

MENTORING NEWS

Vol.2

大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻
文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブ
「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラム事務局
TEL&FAX 06-6879-7720 URL <http://www.ou-mentor.com>

環境・エネルギー工学専攻では、「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラムを展開しています。将来の日本を背負つて立つ若手技術者を、産学連携で育成することを目指したこのプログラム。メンター制度では、大学院学生は、企業や研究機関に所属する社会人をメンターとして、論文、研究、そして将来のキャリアパス等に関する指導・助言を、1対1で受けています。PBリーダー（Project-based Leader）養成制度では、メンターが参画する研究プロジェクト等に学生自身も参加するチャンスを得て、より実践的にプロジェクト推進やマネジメントを学んでいます。その様子を伝え、メンタリング・プログラム（メンター制）に関する知識情報を提供・共有するべく発行しているのが「MENTORING NEWS」です。

CONTENTS

p.1 事務局について	メンタリングの関係性を支える本プログラムの事務局の役割について
p.2-3 メンティへのアンケート結果	7月に実施したメンティへのアンケート結果をご紹介
p.4 <連載>世界のメンタリング	メンタリング研究者 渡辺かよ子教授（愛知淑徳大学）による連載の第2回

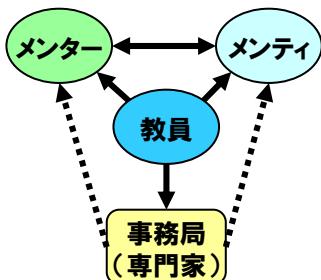
本プログラムの事務局について

事務局が担う機能

事務局の使命は、善意のメンターと未来あるメンティとのより良い関係性を支えるため、誠意をもって、かつ客観的にプログラムを支えることだといえます。そのため、本プログラムに関して大きく、①参加者募集、②スクリーニング（不適切なメンターの排除）、③マッチング（組み合わせ）、④メンター／メンティ双方への事前レクチャー（青年心理学や傾聴スキル）、⑤モニタリング（専門家から構成される事務局による）、⑥プログラム評価 といった役割を担います。

しかし、メンタリングそのものに特有な“技法”があるわけではなく、あくまでも“関係性”そのものに重要な意味があるのです。ですから、事務局には、メンター、メンティ、教員からの小さな声にも耳を傾け、その関係性をできる限り丁寧に、黒子的に支える姿勢と体制が必要だと言えます。

事務局及び事務局バックアップ体制



当事務局は、小林紀（特任助教授）、中村直美（事務）の2名体制でスタートした後、1月、海外機関との折衝に佐々木ノピア（特任助教授）、6月にはメンタリングの研究とプログラム運用の経験を持つ中島薰（特任講師）、つつがない運営を影になり日向になり支える存在として米重由美（事務）が新たに加わりました。また、メンタリングの専門家である渡辺かよ子先生（愛知淑徳大学教授／大阪大学大学院特任教授）をお迎えし、プログラム運用や事務局運営へのアドバイスをいただく体制も整いました。さらには、慶應義塾大学大学院（慶應ビジネス・スクール）の渡辺直登教授（組織心理学）との連携も確保。メンタリングの研究者であり心理カウンセラーでもある渡辺直登教授に適宜サポートいただく環境を整備しています。



事務局からのお願い

- メンティを希望、あるいは興味をお持ちでしたら、気軽に事務局までお問い合わせください。
- 本プログラムについてのご意見・ご質問もお気軽に事務局まで。
- メンターまたはメンティのみなさま、どんな小さなことでも構いませんから、疑問・質問・不安などがございましたら、いつでも事務局までご連絡ください。（中島）knakajima@see.eng.osaka-u.ac.jp

メンター制(メンタリング・プログラム)に関するアンケート調査結果 <メンティ>

現在、「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラムは、メンター制に16名、PBリーダー養成に3名の環境・エネルギー工学研究科の学生が登録しており、本年2月の本格スタート以降、登録学生のそれぞれが何らかのかたちでメンタリング(メンターとの交流)やプロジェクトへの参画を経験しています。

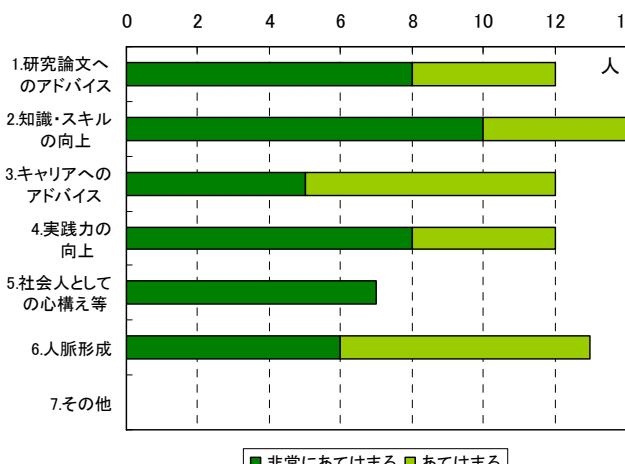
当事務局では、産学連携による若手技術者の育成を目指すプログラムのより良いあり方を真摯に追求するべく、7月初旬、メンティのみなさんへのアンケート調査を実施しました(7月時点での登録者 18名)。メンターを得たいと思った動機、自身にとっての必要性ほか、本プログラムに対する感想や率直なご意見をいただきました。

調査目的：本調査は、本プログラムにおいて
メンターとの交流が実現している
学生の感想や意見を探ることに
より、プログラムのより良いあり方
の探求に向けた基礎資料を得る

調査内容：プログラム参加の動機／意義／参加(継続)意向など
調査期間：2006年7月5日～15日
調査対象：メンター制またはPBリーダー養成に登録の大学院生
回答者数：14(7月時点の登録者の77.8%)
調査方法：設問票による自記式調査
調査主体：「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラム事務局

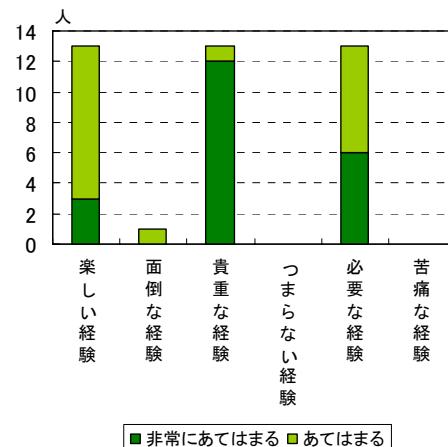
Q メンター制に応募するにあたり、メンターからどう
いう支援を得たいと思いましたか？

回答者の全員が「知識・スキルの向上」での支援を期待して応募しています。



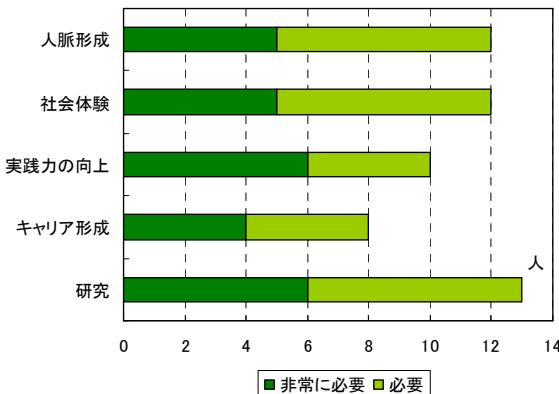
Q あなたにとって、メンターを得てメンタリング
を行うことはどのような経験ですか？

メンタリングの経験を、「楽しい」「貴重」「必要」などポジティブにとらえているメンティが多く見受けられます。

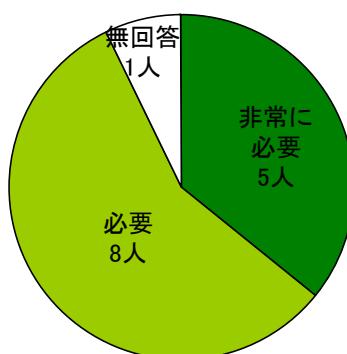


Q あなたにとってメンター制はどの程度
必要であると思いますか？

研究だけでなく、人脈形成や実践力の向上において必要であると感じているメンティが多く見受けられます。



Q あなたにとって、今後もメンタリング・プログラムを
継続していく必要があるだと思いますか？



無回答1名を除く全員が、
自分自身にとってのメンタリング・プログラムの必要性を見出していることがうかがえます。

Q メンターを得て、得られたものがありますか？



具体的に

- 研究室では、学ぶことのできない、自分の研究の世界の情勢を知ることができた。
- 実際に建物を設計された方を紹介して頂き、設計現場のご意見など貴重なお話ができたことが、特にいい経験でした。
- 社会人と接するマナー
- 自分が考えもしなかった様々な視点からのご意見を多くいただけたことです。
- 研究を進めていく上で、研究室の中だけでは、なかなか、思いつかないような視点や考え方を指摘していただき、研究の幅を広くすることができたと思います。
- 専門領域の第一線でまさに活躍されている先生を前にし、実際に話を伺い、大きな目標を考えることができました。もちろん分野に関する幅広い視点を提示いただきましたが、それ以上の”考える”為の心構えをご指導いただいたと思います。
- メンターから、仕事に対する心構えを知ることができた。
- Finish my thesis and hopefully graduate by March next year
- 学術的な知識だけでなく、国際社会で闘い抜く為の心構え。
- 社会に出て、「(他人の話を)聴く力」、「(社内外のニーズを把握する)洞察力」、「(上司などを説得する)提案力」が最も基本的で重要な能力であることを教えてもらいました。そしてメンタリングや研究などの場でその能力を向上できるように心がけている。
- 社会経験、仕事の進め方、研究テーマに対する研究室以外の人物による見解、など。
- 得られたことは様々ですが、中でも大きかったのは実験の知識・スキルの向上と人脈の形成です。

Q メンター制の経験から気付いた点、不安な点、疑問、要望など、感想・意見を自由にお聞かせください。

- ちょうど忙しい時期とかぶってしまい、今まであまりメンタリングを受けることができませんでした。でも、毎回得ることが多いです。メンタリングの前は、資料を用意するのが大変だなあと思つてしまいがちですが、でも行つてしまふとメンターとのお話はためになるし、とても楽しいので、メンタリングから帰る時はとても清々しい気持ちでメンター制度はいいなあ、と思っている自分がいます。
- まだ研究の基礎的な段階にいるために、現時点では、メンター制度を活かしきれていない。今後は、これまで蓄積してきた研究の成果を実際に社会へ活かす為に必要なことを、メンターとディスカッションを重ねる上で見つけ出していくたい。リスクマネジメントの研究では、実際に企業の方から意見を伺うことは非常に重要になってくるため、私にとってこのメンター制度は有意義なものであり、今後さらに活用していくたい。
- 学校内だけではなかなか受けることの無い刺激を受けることができ、非常にいい経験ができていると感じています。たまに思つてしまふことは、どこまで頼つてしまつていいのか、ということです。非常にお世話になっておりますので、いろいろとご迷惑をおかけしていることも多く、申し訳なく感じることもありますが、とても楽しくメンタリングを受けています。
- メンタリングのスケジュールを練っている最中ですが、メンタリングを通して、どのレベルまで到達しなくてはならないのか、目標到達には一体どの程度のメンタリングが必要で、どの程度の期間の滞在が必要であるのか、非常に見積もりが難しいと感じております。また、メンター制の体験談を聞かせて頂くと、メンター制であるが故に得られる体験について、あまり印象に残らなかった気がします。ただのファンドではなくて、メンター制であるということをもっと明確にすべきかと思いました。私は計画段階ですが、メンター制度に大きな期待をしています。メンタリング、PB養成の持つ素晴らしい可能性を生かせるように意識をし、自分の期待を満たすような経験を得ていいけるように、まずは自らが行動していきたいと思っています。
- メンター制度を心から素晴らしいものであると考えておりますし、実際に活動に参加できていることを大変感謝しております。前回が第1回目のメンタリングでありました。今後、素晴らしい取り組みができることが容易に想像できますし、自己努力を駆使して思いっきり楽しんでメンタリング活動に参加したいと思います。ご指導よろしくお願ひいたします。
- 特にありません。これからもますますこの制度が広まっていくことを期待しております。
- メンター制は、学生が何のために今の研究を行っているのかを考えるきっかけとして非常に意味のあるものだと思います。工学研究科の学生として、研究のための研究を行うのではなく、役に立つ、より実践に近い研究を行おうするために‘自分の研究を見つめる’とても良い機会が得られるのだと感じています。今後もより完成させた形としてメンター制を発展させ、ぜひ継続していくべきだと思っています。

ここに紹介した感想・意見以外にも、疑問や要望もいくつかいただきました。それらにつきましては回答を添えて、適宜紹介していく予定です。

メンタリングの研究者である渡辺かよ子教授(愛知淑徳大学)による連載、「世界のメンタリング」の第2回。20世紀初頭の米国で巻き起こったBBBS運動が発展の端緒であるメンタリング。今や世界各国でメンタリング・プログラムが展開されており、展開目的は実に多様です。しかし、その真骨頂は、北アイルランドのメンタリング・プログラム「Turning Point」が掲げているメンターのモットー(本文参照)に尽きると言えるでしょう。メンタリングに関わる(メンタリング・プログラムを展開する/メンターになる/メンティになる/事務局の一員になる...)上で、常に心にとどめておきたい言葉です。

連載 第2回 メンタリングとメンタリング・プログラム

メンタリングとは/メンタリング・プログラムとは

メンタリングとは、成熟した年長のメンター(mentor)と若年のメンティ(menteeまたはprotégé:プロテジエ)とが基本的に一対一で継続的定期的に交流し、役割モデルと信頼関係の構築を通じて発達支援を行うものである。メンタリングには、日常的自然発生的なインフォーマルな類型と、プログラムを介した人為的制度的なフォーマルな類型があり、後者がメンタリング・プログラムないしはメンター制、メンター制度と呼ばれている。

メンタリング・プログラムは、①参加者募集、②スクリーニング(不適切なメンターの排除)、③マッチング(組み合わせ)、④双方への事前指導(青年心理学や傾聴スキル)、⑤モニタリング(専門家から構成される事務局による)、⑥プログラム評価、から構成される。その特徴としては、①資格制度による市場独占をすることのない市民ボランティアによる支援・助言であること、②メンターとメンティ双方に新たな出会いと生きがいを与える、メンターの示す役割モデルと善意がメンティの人生に大きな影響をもたらすこと、③専門家によるモニタリングが双方の関係性を支援すること、等がある。

米国のみならず、先進各国での多様な展開

今日のメンタリング・プログラムは、米国で20世紀初めに創設されたBBBS(Big Brothers Big Sisters、日本ではBBSと表記される)運動を中心に、学校や大学・地域・企業が連携した、ごく普通の市民ボランティアによる青少年発達支援プログラムとして1980年代以降急速に拡大した。メンタリング・プログラムは企業の人材開発や社会貢献、医療従事者やエンジニア、教員などの専門職養成、青少年問題への対応として脚光を浴び、LD児教育から英才教育、総合的学習、不登校や若年失業対策にまで、

個に対応した発達支援方策として活用されている。米国で開始されたメンタリング・プログラムは、イギリス、カナダ、オーストラリア、南アフリカ等、各国に影響を及ぼし、それぞれの国や地域の実情に応じたプログラムの工夫が重ねられている。阪大メンター制もこうした世界的動向と軌を一にするものである。

メンタリングの真髄

世界のメンタリングはこのように多様な側面を持つ現象であるが、その起点となっているのは、メンターという「見知らぬ人の親切」である。以下の北アイルランドのメンタリング・プログラムであるTurning Pointが掲げるメンターのモットーは、あらゆるタイプのメンタリング・プログラムを機能させる動因となっている。「今から百年後、私が素敵な車、豪邸を持っていたかどうか、あるいは職業的成功をおさめたかどうかはほとんど結果を残さないであろう。が、私が一人の子どもの人生における重要な存在となることによって世界は異なったものとなるかもしれない。」



渡辺 かよ子

愛知淑徳大学現代社会学部教授、大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻特任教授

＜今後の連載予定＞

第3号は「メンタリングの成果」。以降、アメリカ、イギリス、オーストラリアなど、各国におけるメンタリングの取り組みをご紹介していく予定です。

ご期待ください。

◇バックナンバー◇

第1回(創刊号)「メンターの語源」